
東方、暗めの短編集(笑)

F(フォルテ)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方、暗めの短編集（笑）

【コード】

N0565T

【作者名】

フォルテ

F

【あらすじ】

これは酷いWWW大分マニアックな人にしか受けなさそうです。

パチユリー（前書き）

気分を悪くされる危険があります。今なら戻れます。

パチユリー

痛い……

痛いよ……

「さて、貴方は何度言っても聴かないようね？」

身体中が痛みだす。焼けるように熱い。

僕の身体には魔術の術式が張り巡らされている。僕は人間の形をした本になって、何ヶ月もこうして過ごしている。

「いだい……さい……ごめん……なさい……ごめんなさい……」

パチユリーさんが怒っているのはなんでだろう。

僕がこあさんに話し掛けたから？

僕が心から謝っていないから？

僕がパチユリーさんを怖がっているから？

僕が……僕が……僕が……僕が……僕が……僕が……僕が……僕が……僕が……僕が……

……僕が……僕が……僕が……僕が……僕が……僕が……僕が……僕が……僕が……

全部僕のせい……？

「その言葉は本当かしら？」

パチユリーさんは優しくかった。

些細なことで家出をしてしまい、夜になるにつれ妖怪に襲われる恐怖が増し、泣き出しそうに道なき道を歩いていると、何処とも知れないお屋敷に着いてしまっていた。

辺りはもう暗くなっていて今から引き返すだけの勇気はなかった。

お屋敷の人が優しい人でありますように……ただそれだけを祈りなが

ら訪ねることにした。

結果は僕の予想を超え、暖かく迎え入れてくれました。門番の人は気楽そうに寝ていましたが、体を揺らすと起きてくれた。いきなり頭を撫でられた僕は驚きと安心感で涙が出てきて、それはいつまで経ってもとめどなく眼から溢れ出していた。

いつまでそうしていたかは定かではないが、ふと上を見ると、頭にナイフが刺さって泣いている門番さんが居た。その後ろには、銀色の髪をした人が居た。その人が言うには、このお屋敷の一番偉い人が見るに見かねて入れても良いと言ってくれたらしい。

お屋敷の中はとても綺麗で、美味しいご飯を食べた。

その後には招かれたのが今僕が居る図書館だ。

ちよつと暗かつたけど、優しいパチュリーさん、おつちよこちよいだけど優しい小悪魔さん。

読みたい本を小悪魔さんに訪ねればすぐに持ってきてくれて、パチュリーさんの膝の上でお話を聴かせて貰った。

急に家族を思い出して再び涙が溢れ出た。そんな僕をパチュリーさんは抱きしめてくれた。

「はい……」

身体に伝わる熱は和らがない。

まだ信用されてない。

どうすればいいだろうか……

「お願い……します……」

「もう頃合いですよ……許してあげるわ」

頭が撫でられると今までの痛みが消え、代わりに不思議な暖かさが身体中を包み込まれた。

少し前は恐怖なのに、お仕置きが終われば優しいパチュリーさん。

僕はどうすれば良いのだろうか……

「パチユリーさん」

「敬称を撥ねなさいと言い聞かせている筈よ」

「パチエ……」

「そうよ、いい子ね」

「ありがとうございます」

「いい子には甘い甘いホットミルクのご褒美よ」

目の前にホットミルクの入ったマグカップが差し出される。きっと温かくて甘いんだろうな……

パチユリーさんを待たせてしまうと痛いことをされる。ゆっくりとパチユリーさんの膝の上に座る。

いつ決まったのかは覚えていないが、此処が自分の席で、これからも変わらないのかな……

いつまで待ってもマグカップは渡されない。「パチユリー？」

「あら、待たせたかしら？」

「いえ、ごめんなさい……」

「謝らなくていいのよ」

優しく頭が撫でられ、口の前にコップが差しのべられる。

このまま飲めば良いのかな……

「ごめんなさ あぐー!？」

パチユリーさんの顔を見ようとした瞬間脇腹を蹴られた。

「ごめん…な…許し いた…い」

身体中が焼けつくように熱くて痛い。

「ゆる……」

「きちんと覚えられないような子にはもう少しお仕置きよ」

じんわりと踏みつけられる。熱さの上に刺すような痛みまで……

「もう…や……」

身体が動かない。

もうやめて……

「そっ……」

終わった……

「はあ…はあ……」

身体中の力が抜けていく……

「これで、最後よ」

「え　ぐえ!?!」

完全に力の抜けたお腹を思いきり踏みつけられた。

「　つく…あ…おえ…おえええ…」

さっき飲んだホットミルクが逆流して床に吐いてしまった…

「何をしているのかしら…」

目の前が真っ暗に……

暖かな日差しが空いっぱいに広がり、日を浴びて少し火照る身体に草や樹の匂いを含んだ穏やかな風が気持ちいい。

「さあ、あの木陰で休みましょう」

「ま、待ってください…」

「私も少し待ってほしいです」

パチュリーさんに日傘をさしながら歩いているので少しぶらついて

しまつ……

小悪魔さんは荷物を持っているので自分よりも遅い。

「大丈夫よ。小悪魔も急がなくていいわ」

「は ひっ!？」

小悪魔さんがいつものように転びそうになる……

「もう…仕方ないわね……」

魔法で荷物だけが浮かされ、結局小悪魔さんは転んでしまつ。

「酷いですよパチユリー様」

「下は草だから大事ないでしょう」

「あはは、小悪魔さん、草が髪についてますよ」

「ふえ〜ん…もう、お二人とも笑わないでください」

楽しいな……

「あは
」

ここは…図書館? 夢? ああ……草原なんてなかった…小悪魔さんも
優しいパチユリーさんも居なかった……

「おはようございます」

「こあ…さ」

そうだ、パチユリーさん以外の人と話したらお仕置きだった……

「大丈夫です、今パチユリー様は用事で出掛けていますから。お腹空いてませんか？」

ずつとなにも食べていないからすごくお腹は空いている。
僕は本なのに……

「はい」

「当然ですよね…それと、ごめんなさい、いつも話しかけるのは私なのに……」

「大丈夫です。痛いけど、大丈夫です」

「ありがとうございます…はい、トーストで、ジャムは勝手につけたけど、大丈夫？」

「ありがとうございます」

甘くて美味しい。

「もう食べちゃったんですね」

「ごめんなさい…美味しくて、なんにも食べてなくて……」

「謝ることなんかありませんよ。その私こそ」

「邪魔するぜ」パチュリーは居ないみたいだな。今日も本を借りてくぜ」

誰だろう？……でもパチュリーさんは勝手に本を持っていたら怒るから止めなくちゃ。

「あの…本を、勝手に持っていないでください」

「誰だ　ってなんだその刺青は……」

「えと…刺青じゃなくて、契約の印で……あの、本を持っていきないでください」

「全身に張り巡らせる契約印なんてないぜ。お前はたぶん契約じゃなくて呪いをかけられているんじゃないのか？」

話している最中にも本が持っていていかれている……本当は話すのも駄目だけど、本を持っていかれたらもつと痛いお仕置きをされるかも知れない。

「パチュリーさんはそんなことしません。お願いします、本を持っていかないでください」

本の入った袋にしがみついてお願いする。

「中々手強いな」

「あの、魔理沙さん…お願いがあります」

小悪魔さんも本が持っていていられないようにお願いするのかな……

「……で、……君をお願いします」

「分かったぜ。最近パチュリーの様子がおかしいとは思っていたけど、まさかそんなことまでするなんてな……」

「あの……お願いします」

「いいぜ、今回は本を持っていかない。その代わりに、お前を借りるぜ。それでも良いなら手を打つぜ」

僕を……でも、パチュリーさんにはいつも怒られているし、きっと邪魔な本だと思われるから行った方がいいかも知れない……

「いい……です」

「よし、じゃあお前を死ぬまで借りてくぜ」

「え　わっ!?!」

いきなり抱えられて箒の上に……飛んだ!?

「お前、名前はなんていうんだ?」

「僕……僕は蒼穹^{そら}」

「そうか……良い名前だな。私は霧雨魔理沙、宜しくな」

「はい…でも、行くなって書いてもいいですか？」

「そこは小悪魔に任せてるから安心するんだな」

「ごめんなさいパチュリーさん。最後まで勝手に出ていきます。」

「じゃあ、えと…宜しくお願いします」

パチユリー（後書き）

キリが悪いんじゃないかと、まだ続きますはい。

飢死しそうな半人半霊のお話

「今宵のお話は飢死しそうな半人半霊のお話。私は話し手の【モノローグ】と申します。どうぞお見知りおきを・・・」

此処は何処でなく、何時とも判りません。しかしその場所はありません。むかし昔、白玉楼というところにいた半人と半霊のふたり子もちの亡霊少女が、びんぼうのどんぞりに落ちこんで、団子一串すらいにおしこむこともできなくなりました。三人とも、お腹がぺこぺこでどうにもしんぼうできなくなると、母親は、正気をうしなつてやぶれかぶれになり、そうりょうの娘達に、

「わたしはね、なんでもかんでも妖夢を殺すよ。そうすれば、私の食べものができるもん」
と言いました。妖夢は、

「いやですよ！幽々子様ったら、止めてください、私、人里に行つて、物乞いせずに、なにか食べるものをもってきますからね」

と言つて、外にでると、何の変哲もない団子を一串もつてもどつてきました。それをみんな食べたのですが、あんまりぼつちなので、おなかのたしにはなりません。それで、幽々子は半霊に、

「こんどは、いやでもあなたの番よ」
と言いました。すると、半霊は、

「嫌です、幽々子様。私人里に行つて、だれにも覺らせず、どこかしらでなにか食べるものをとってきますから」
と半霊ながらうまい具合に意志表示をしました。

半霊は出かけて行つて、何の変哲もない団子を二串もつてもどつてきました。それをみんな食べてましたけれども、あんまりすこしばかりなので、ひもじのは、どうにもなりません。

ですから、なん時間かたつと、幽々子は、またもや半人と半霊にむかつて、

「妖夢達はね、やっぱり死ななきやだめよ、だって、私達が、みんな飢死するにきまつてるんだもん」

と言いました。すると、半人と半霊は、すぐさま、

「あの、幽々子様、私達、横になって、寝ませんか、そうして、桜が咲くまで起きるのをよしましよ」と、へんじをしたものです。

そんなわけで、みんな、ごろりと横になって、すやすや寝こんでしまいました。そのよく寝てしまったこと、だれひとり、幽々子様や妖夢達を起こすことができませんでした

もつとも、幽々子様だけはいなくなってしまうって、その後どこにいるのだから、知っているものは一人もありませんでした。

「さて、今宵のお話は此処までと致しましょう。」

幽々子は何処に？

「何処でしょうか。」

妖夢と半霊は？

「どうなったでしょうか。起きないままかも知れないのではないのでしょうか」

飢死したのは誰？

「知るに及ばないのではないのでしょうか」

「私はモノローグ（独り言）。聴くも流すも貴方様次第。縁が続きますならば、お話を聴きください」

それではこれにて【飢死しそうな半人半霊のお話】閉幕と致します。

屠殺ごっこをした子供達のお話1

「私は語り手【モノローグ】何処の誰でもありません。今宵のお話は屠殺ごっこをしたこどもたちのお話です。それでは、開幕と致します」

忘れ去られた世界、幻想郷の何処かに、五歳か六歳ぐらいの妖精と子どもの妖怪、まあそういったような歳のいかないうち子どもたちが遊んでいました。やがて、子どもたちは役割を決めて、一人の吸血鬼に、

「おまえは牛や豚をつぶす人だよ」

と言い、もう一人の大妖精には、

「おまえはお料理番だよ」

と言い、また蟲の妖怪には「おまえは豚だよ」

と言いました。それから、女の子にも役をこしらえて、一人は別のお料理番になり、もう一人はお料理番の下ばたらきの女になることにしました。この下ばたらきの女は、腸づめをこしらえる用意として、豚の血を小さい容器いれものに受ける役目なのです。

役目がすっかりきまると、豚をつぶす人は、豚になるはずの蟲の妖怪につかみかかって、ねじたおし、レーヴァテインでその妖怪の咽喉どを切りひらき、それから、お料理番の下ばたらきの女は、じぶんの小さないれもので、その血をうけました。

そこへ、人里の議員がはからずとおりかかって、このむごたらしいようすが目にはいったので、すぐさまその豚をつぶす吸血鬼をひたてて、里長様の寺子屋につれて行きました。里長様は、さっそく議員をのこらず集めました。議員さんがたは、この事件をいっしょうけんめいに相談しましたが、さて、吸血鬼をどう処置しまつしていいか見当が付きません。これが、ほんの子どもごころでやったことであ

るのは、わかりきっていたからです。ところが、議員さんのなかに賢い焼き鳥屋が一人あって、

「それなら、慧音が片手にみごとなクランベリーを、片手に幻想郷で通用する百貫文をつかんで、子どもを呼びよせて、両手を子どもの方へ一度つきだすのはどうだ。もし、子どもが、クランベリーを取れば、無罪にしてやるし、金のほうを取ったら、死刑にすればいい」

と、うまいちえをだしました。

そのとおりにすることになりました。すると、吸血鬼は、笑いながらクランベリーをつかみました。それで、子どもは、なんにも罰をうけないですみました。

「吸血鬼はどうして妖怪を殺してしまったの？」

「では、何故私達は牛や豚を殺すのでしょうか」

「吸血鬼に罰は無いの？」

「罪を犯していないからではないでしょうか」

「子供心とは、無邪気に、しかし残酷なものなかも知れません。ですが、大人は反対に、邪気を持っていても残酷ではないのでしょうか。」

さて、今宵のお話は【屠殺ごっこをした子供達のお話】これにて閉幕と致します。

屠殺ごっこをした子供達のお話2

「さあ、皆様方。今宵のお話は屠殺ごっこをしたこともたちの別のお話。私は語り手【モノローグ】それでは、開幕と致します」

あるとき、庭師が豚を屠殺^{つばい}すところを、子どもたちが見ました。やがて、おひるすぎになって、子どもたちが遊戯をしたくなると、ひとりの氷の妖精が、もうひとりの大きい妖精に、

「おまえ、豚におなり。あたい、ぶたをつぶす人になる」

と言って、抜き身の小刀^{ナイフ}を手にとるなり、大妖精の咽喉^{のど}を、ぐさりと突きました。

ふとましいおかあさんは、上のおへやで、ゆつくりをたらいに入れて、お湯をつかわせていましたが、その大妖精のけたたましい声をききつけて、すぐかけおりました。そして、このできごとを見ると、子どもものどから小刀を抜き取るが早いか、腹たちまぎれにそれを、豚のつぶしてであった妖精の心臓へ突きたてたものです。

それから、たらいのなかのゆつくりはどうしているかと思つて、その足でおへやにかけつけてみたら、ゆつくりは、そのあいだに、お湯のなかでおぼれ死んでいました。

これが原因^{もと}で、妻は心配がこうじて、やぶれかぶれになり、めしつかいの者たちがいるいろなくさめてくれるのも耳に入らず、首をくくってしまいました。

庭師はたけからかえつてきました。そして、このありさまをのこらず見ると、すっかり陰気になって、それから間もなく、この庭師も死んでしまいました。

さて、如何でしたか。

この子は罰を受けてしまったのか、それとも、おかあさんのきまぐれで死んだのでしょうか。

今宵のお話は【屠殺ごっこをした子供達のお話】これにて閉幕と致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0565t/>

東方、暗めの短編集(笑)

2011年11月14日12時21分発行